

福音的キャンパス・ミニストリーを目指して¹

大学宗教部長 大宮 謙

呼びかける声がする。

「荒れ野に主の道を備えよ。

私たちの神のために

荒れ地に大路をまっすぐに通せ。」（イザヤ書40章3節）

青山学院創立150周年、青山学院大学開校75周年の記念すべき年度にあたり、改めて、多くの先達の労苦と取り組みに感謝すると共に、今後の本学のキャンパス・ミニストリーについて、いくつかの点について論じてみたい。

1. キャンパス・ミニストリーで大切にしたいこと

キャンパス・ミニストリーとは何かを多角的に論ずることは、紙幅の都合から困難であるので、ここでは、イザヤ書40章3節を頼りに、キャンパス・ミニストリーとは、「神の呼びかけに応えて、キャンパス内に、神の愛に触れる道筋を、まっすぐな大路として通す務め」であると定義したい。キャンパス内の「荒れ野」や「荒れ地」を具体的に提示することは差し障りがあるであろうし、個別の事例や状況が念頭にあるわけでもない。それでも、一般的には、「福音的でない、あらゆる状況」を指して、「荒れ野」あるいは「荒れ地」と呼ぶことができよう。別言すれば、それは、本来、神の愛に促されて大切にされるべき一人一人の尊厳が、ないがしろにされる状況と言えよう。

そもそも、福音Good Newsとは何か、と言えば、端的には「イエス・キリストによって示された、相応しくない者を、それにもかかわらず救う神の愛と恵み」であると言い得よう。そのため、福音を伝えられ、受け入れる者には、驚きと感謝が伴うのである。それは、すなわち、「こんな自分が、愛され、救われている」ことへの驚きと感謝である。つまり、この世の価値観を超越した形で、自分が受け入れられ、愛さ

1 本論は、あくまでも大学宗教部長の個人的見解であり、大学宗教主任会ないし宗教センター全体の総意に基づくものでないことを最初にお断りしておきたい。聖書の引用は聖書協会共同訳による。

れ、大切にされていることを知る経験こそが、この「驚きと感謝」を生み出すのである²。こうした「驚きと感謝」をそのままに受け取ることを阻害する要因があるのであれば、それこそが、キャンパス内の「荒野」あるいは「荒れ地」と言い得よう。そうであれば、このような阻害要因を癒す取り組みは、キャンパス・ミニストリーの重要な課題の一つに挙げ得よう。

現代社会において多様性の尊重が訴えられ、少しずつでも浸透してきているとはいえ、成績、業績、功績が重視され、勝つことが尊ばれ、賞賛される傾向は、本学においても避け難いことであるように思われる。もちろん、努力や成果が認められることは、教育、研究機関として本学においても大切にされるべきことではある。言うまでもなく、学生が、しっかり学び、知的刺激を受け、自らの専門性を高めることは大学教育が本来目指すべきことである。また、研究機関として、所属する教職員が、専門性を生かして社会に貢献しようとすることは当然であり、その結果として、業績、功績が認められることは、むしろ喜ばしいことではある。

ただ一方で、いくら頑張っても、努力しても、なかなか形にならずに苦しんでいる人に、いかに寄り添い続けることができるのか、という点は、キャンパス・ミニストリーの真価が問われるところであろう。あまりナイーブなことを言い立てることは本意ではないが、成績、業績、功績、勝ち負けを超えたところで、人として、組織として、成長し、高められていくことに仕えるサーバント・リーダーとしての務めを果たしていきたいと願うものである。

2. キャンパス・ミニストリーで注力したいこと

キャンパス・ミニストリーを学内のキリスト教活動と重ねて受け止めることができるのであれば、その三本柱は、1) 大学礼拝、2) キリスト教理解関連科目、3) 宗教センター活動、となるであろう。ここでは、それぞれについて、網羅的というよりは、いくつかの点に特に注目する形で論じることとしたい。

1) 大学礼拝

授業期間中、2つのキャンパス（青山、相模原）で月曜日から金曜日まで1、2限の間の時間（10:30-11:00）および火曜日の夕方（18:30-19:00、青山キャンパスのみ）に礼拝が献げられていることは、たいへん感謝すべきことである。礼拝を支えてくださっている全ての方々にも、深い感謝をお伝えしたい。具体的には、学外から、説教者あるいは奨励者として、礼拝でのメッセージを語ってくださる多くの教会の牧師の皆さん、チャペル・ウィーク（特別礼拝週間）に来てくださる各方面で貴重な働きをして

2 コリントの信徒への手紙一 1:26-31を参照。

おられるキリスト者の皆さんがおられる。一方、学内にも、礼拝音楽を担当して下さる大学オルガニスト、ワーシップ指導者、夕礼拝の賛美チーム、ACF（青山キリスト教学生会）礼拝の賛美チーム、折々に奉唱、奉鐘を献げてくださる大学聖歌隊、ゴスペルクワイア、ハンドベルクワイアの指導者、隊員の皆さんがおられる。また、学生、教職員の中にも奨励、司会、奏楽を担当して下さる方がおられる。さらに、週報という名の礼拝プログラムの作成、折々の礼拝動画の録画、編集、公開を担当して下さる皆さんがおられる。もちろん、大学宗教主任会メンバーも基本的には半期に6回ずつ説教を担当する³。これらの皆さんの尊い働きに支えられ、また神の守りと深い導きの中で、心からの礼拝が献げられていることは、ただただ感謝である。

こうした中、礼拝出席者については、2024年度前期の実績で言えば、朝の礼拝が青山キャンパス一日平均170人程度、相模原キャンパス一日平均90人程度、青山キャンパスの夕礼拝は一日平均70人程度という状況である。両キャンパスで学部生だけで2万人弱、大学院生800人強、専任の教職員800人程度という本学で、さらに礼拝に出席する皆さんの裾野を広げることに取り組んでいきたいものである（学生数、教職員数については、それぞれ <https://www.aoyama.ac.jp/outline/information/student/>、<https://www.aoyama.ac.jp/outline/information/faculty/>を参照）。

大学礼拝についての新しい動きとしては、今年度から週報の紙での配布を止め、座席や出入り口で提示するQRコードからダウンロードする方式に切り替えたことが挙げられる。今後、方式をさらに改善する予定であり、それによって学生たちの週報に記載された本学のキリスト教関係の情報へのアクセスがよりスムーズになり、また、学生たちへのさらなる情報発信も充実することを期待したい。

大学礼拝については、さらに2つの点に触れておきたい。一つは賛美についてである。夕礼拝では毎週、また午前中の礼拝でも折々に、伝統的な讃美歌集とは異なる現代風のワーシップソングで賛美する取り組みが行われている。学生たちの受け止め方は多様であろうが、従来の讃美歌集の讃美歌であれ、現代風のワーシップソングであれ、できるだけ多くの学生たちが心からの賛美を神に献げることができるように、学生たちが自ら歌うことを促していきたい。さらに、可能であれば本学独自の讃美歌をいくつか生み出し、礼拝の中で繰り返し歌うことで、学生たちの「魂を養う歌」をさらに提供できればと考える。

もう一つは、黙想（メディテーション）の機会としての大学礼拝の位置付けを定着できればと考える。そもそも礼拝には、自ら神の前に身を置くことによって、自分の心と体を整える働きがあるであろう。安息日が、そもそも心と体を休ませ、神がこの世

3 ここでの「大学宗教主任会メンバー」は、宗教センター事務長を除く、大学宗教主任12名、宣教師1名、計13名を指す。なお、大学宗教主任の構成については注6を参照。

界を創造したことを思い起こす時であるように⁴、大学礼拝も、世界の創造主である神を思い、その御子イエス・キリストの示してくださった神の愛に触れると共に、自らの心と体を休ませる時であると位置付けることができよう。そうであれば、授業、研究、学内業務に次々と取り組むことの多い中で、学生および教職員が心身を整える貴重な機会として、大学礼拝を学内において、さらに周知していきたい。

2) キリスト教理解関連科目

必修科目であるキリスト教概論Iおよびキリスト教概論IIに加え、様々なキリスト教理解関連科目（個々の科目名については<https://www.aoyamagakuin.jp/outline/christ/subject.html>を参照）が開講されていることは、たいへん感謝すべきことである。さらに、キリスト教学校の教師を目指す学生向けの教育プログラムとして、ソーパー・プログラムが開講されていることは、重ねて感謝すべきことである。これらの科目の全てを、大学宗教主任を含む学内の専任教員のみで担当することはできないため、多くの非常勤講師に協力していただいている。非常勤講師を引き受けてくださっている皆さんには深く感謝するものである。前期と後期の期末の時期には、キリスト教理解関連科目担当者懇談会を開催し、学びと交流の機会を持っている。専門分野についての講義を中心とする時もあれば、授業に関する共通理解、方向性を議論し、確認することを中心とする時もある。

キリスト教理解関連科目についての新しい動きとしては、キリスト教概論の教科書である『地の塩、世の光 人物で語るキリスト教入門』（教文館、2006年発行）の改訂作業に着手したことが挙げられる。現在の教科書『地の塩、世の光』は、およそ20年前に当時の大学宗教主任8名全員が執筆を分担した力作である。今回の改訂では、その内容を基本的には踏襲しつつ、項目として取り上げる人物や、それぞれの内容について、この機会に見直すこととした。こうした取り組みによって、キリスト教理解関連科目の中で唯一、全学生に対する必修科目であるキリスト教概論で、何をどのように教えるかという点についての共通理解を改めて確認したいと願うものである。本学が多くの非常勤講師の協力を仰ぎつつキリスト教理解関連科目を開講している中で、改訂版の教科書『地の塩、世の光』を、本学のキリスト教理解とその教育内容についての指針となるものとして位置付けたいと願っている。

もとより、キリスト教の中にも、聖書の読み方、様々な事柄に対する見解について、多様な立場がある。それぞれの理解、立場、信仰を最大限に尊重しつつも、本学として大切にしたいキリスト教理解の中心を提示するという意味で、言わば、我々の「信仰告白」を明らかにする歴史的文書を公にするという意識を持って、祈りつつ、今回の改訂作業に取り組みたいと願うものである。

4 出エジプト記20:8-11、申命記5:12-15を参照。

3) 宗教センター活動

宗教センター所属の学生四団体である、大学聖歌隊、ゴスペル・クワイア、ハンドベル・クワイア、青山キリスト教学生会（ACF）において、四団体合計で200名を超える学生がメンバーとして登録され、それぞれの指導者、担当チャプレンのもと、活発な活動が行われていることは感謝である（個々の団体については<https://www.aoyamagakuin.jp/outline/christ/action/student/>を参照）。また、各学部、学科のキリスト教推薦会も、所属する学生は合計で200名を超える。たいへん喜ばしいことである。さらに、オルガニスト養成講座、ワーシップ・ミュージシャン養成コースにも、それぞれ20名弱、10名強の受講生が与えられている。また、毎年3月に行われている3週間のオーストラリア・クリスチャン・ホームステイ・プログラムの参加者も20名を超える。ただし、これらの団体、講座、プログラムには、重複して参加、登録している学生も少なくない。それでも、重複を勘案しても、おそらくは少なくとも300名前後の学生が、毎年、宗教センターの活動に関わっていることになる。一人一人を宗教センター活動に招いてくださった神に感謝し、一人一人と魂に触れる関わりを持つことを大切にしたいと祈り願うものである。時には、人間関係の行き違いなどで活動を離れざるを得ないケースもあるであろう。そのような時にも、迷い出た一匹の羊を探し求める羊飼いの思いを共有するものでありたいと願う⁵。

宗教センター活動についての新しい動きとしては、9月に青山キャンパスの宗教センターが旧短大図書館の一部に移転したことを挙げ得よう。広く、まとまったスペースを生かして、従来、宗教センター活動に関わることのなかった学生たちとの接点を増やしていくことにも取り組んでいきたいと願うものである。また相模原キャンパスの宗教センターにおいても、キャンパスの真ん中にチャペルがある立地をさらに生かして、礼拝堂やラウンジへの学生の流れを、より豊かなものとするべく取り組んでいきたいものである。

冒頭に引用したイザヤ書の言葉を引けば、「大路をまっすぐに通す」ためのアイデアを集め、デザインを工夫し、学生、教職員が、ふと来たくなる場所としての魅力を各キャンパスの宗教センターが増し加えることができるように願うものである。

3. 社会の中でのキャンパス・ミニストリー

本論の冒頭では、キャンパス・ミニストリーを「神の呼びかけに応えて、キャンパス内に、神の愛に触れる道筋を、まっすぐな大路として通す務め」と定義した。しかし、それは、キャンパス内で完結するものではないであろう。神の愛に触れた学生、教職員が自らの信仰を自覚的に意識し、告白する場所である地域の教会との協力関係

5 マタイによる福音書18:10-14を参照。

の一層の深まりが必要である。また、各キャンパスに接する地域の皆さん、自治体との協力関係をも大切にするものでありたい。別言すれば、教会からも地域からも、「あって良かった青山学院」と思っただけの本学であるために、サーバント・リーダーシップを発揮していくことに努めていきたいものである。

そのための一つの提案として、青山学院宗教センター内に「キリスト教研究センター」を立ち上げたいと願うものである。このセンターでは、幅広いキリスト教の研究領域において、宗教主任はもとより、国内外の研究者、教会の牧師、社会活動の実践者が集い、自由闊達な雰囲気の中で、研鑽の場を持ち、共同研究に取り組み、その成果を世に問う活動を進めていきたいと願うものである。本学に12名もの大学宗教主任および宣教師1名が集められていることは⁶、学内の日常的なキャンパス・ミニストリーに止まらず、より広い視野で、より広い課題を見据えた取り組みをするようにとの神からのチャレンジであると信じるものである。

こうした取り組みの中で、例えば、教会および教会の牧師が担う課題を、「キリスト教研究センター」が共同研究の課題として受け止め、研究成果として結実させることによって、研究者の裾野を広げ、教会を立てる神学を再構築していくことが出来ればと願うものである。また、サービス・ラーニングの実践の場として地方の教会を位置付け、地域の課題に教会と「キリスト教研究センター」が共に取り組む体制を構築することが出来れば、地域の教会が「祝福の基」(創世記12:2)としての機能を、より果たすことに大いに資することとなろう。さらに、平和構築についての神学的、実践的取り組みについても、国内外の研究者、実践者と共に共同研究の場を設けることができればと願うものである。

幸いなことに、本学の源流であるメソジストには、IAMSCUという世界的ネットワークがあり、また、アジアのキリスト教学校にはACUCAというネットワークもある⁷。こうしたチャンネルを生かしつつ、国の内外の課題を神学的、宣教的課題として受け止め、研究を深め、成果を発信していくことこそ、神からの聖なる委託であると信じるものである。

4. むすびに

本学のキャンパス・ミニストリーについて、大学宗教部長としての2年間の経験をも踏まえて、いくつか述べさせていただいた。ともすれば日常の務めに取り組む中で、まとめることの難しい事柄について、改めて文章にする機会を与えられたことに

6 青山キャンパス7学部、相模原キャンパス4学部各1名、専門職大学院に1名、計12名。

7 IAMSCUはInternational Association of Methodist Schools, Colleges, and Universities、ACUCAはAssociation of Christian Universities and Colleges in Asia、のそれぞれ略である。

深く感謝したい。もとより、経験不足な点もあり、考えの及んでいない点多々あろう。皆様のご批判、ご意見を仰ぎたいと願うものである。この小論が、本学のキャンパス・ミニストリーについて、祈りつつ、神の御心を尋ね求めるための一助となれば望外の喜びである⁸。

8 ローマの信徒への手紙12:2を参照。